

2024年3月24日

受難週の黙想

マタイによる福音書 27 章を土台に

あのお方は兵士たちに囲まれ、鞭で打たれ。頭を小突かれながら血でよごれたよれよれの衣服をまとってエルサレムの門から出てきました。右肩に生木の十字架を担いでよろめきながら歩いています。周囲に人だかりがありますが、人々の多くは目を背け、女性たちは泣き叫んでいました。子供たちは家の中に追いやられ、男たちの怒号だけが耳に響きました。

あのお方の足は弱々しく、左右によろけ、頭に刺された大きな茨の冠で髪の毛も血まみれでした。肩からも背中からも衣服に血がべったりとにじんでいました。表情は土気色、もはや死者の白さのように見えることもあります。血まみれのお顔は埃と殴られたアザやコブでよごれて、はれあがり表情は苦悩と痛みでゆがみ、処刑の場所に向かって歯をくいしばって足を進めようとしているようでした。

疲れ果て、力尽き、ついに倒れたまま動けなくなりました。兵士たちは彼を殴りつけ、抱き起こし、罵倒し、鞭で殴り、十字架を担がせようとしたのですが、あの方には力が残っていませんでした。

たまたまそこを通りかかった旅人のひとりが兵士に引っ張り出され、十字架を担いで丘の上まで進むように命じられています。困惑しているようですが、あの方と目が合ったとき、その人は決意して十字架と一緒に担ごうと十字架をもちあげ自分の肩に背負いました。

それでも、ずいぶん重そうで、よろよろと進んでいきます。

やっとゴルゴタの丘に到着。兵士たちは十字架を横たえ、あのお方をその木の上に寝かせ、十字架に手足を縛り、さらに手足に太い釘を打ち付けています。そのおぞましい音が耳から消えません。釘を打ち込むハンマーが振り落とされるたびに、恐ろしいほど苦しげなあの方の悲鳴があがりました。手も足も血まみれになり、兵士たちも返り血を浴びて血だらけになっています。やがて、十字架のために掘られた穴に十字架が落とされ、ロープで十字架がひっぱりあげられ、ドスンと穴のところに十字架が立てられました。

すでに力なく、しかし苦悶に顔をゆがめながら、あのお方は大きな声で叫ばれました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分で何をしているのかわからないのです」目を見開き、上を見上げ、この言葉を何度か繰り返していました。一瞬、私と目が合ったようなきがしました。私は目を伏せ、こみ上げるものをこらえるのに必死でした。

ほかにも右と左に十字架が立てられました。その十字架につけられていた強盗は兵士たちを口汚く罵り、怒りとうらみ、つらみの心を表していました。あの方は罵(ののし)ることも、怒りを表すこともありませんでした。不思議なのですが、あの方のまなざしからは「苦痛」「悲しみ」「寂しさ」はかんじられますが、「怒りや憎しみ、軽蔑」の雰囲気はまったくありません。

道を行く人たちはその十字架をみながら、あのお方にこう叫んでいました。
「あんたは70年もかけて我々が建てた神殿を壊して3日で建て直すなどと言ったんだろ。
だったら十字架から降りてきたらどうだ。そんな苦しみの中に神の子が縛り付けられているなど、おかしいことだ。今すぐ降りてきて自分を救ってみろ。」

一週間ほどまえにはあの方のエルサレム入場を「ホサナ」と叫んで大歓迎していたのに。
この態度の変わり方は一体？

あのお方は目を上に向け何かをつぶやいておられました。

宗教家たちは他の仲間たちと勝ち誇ったような表情でこう叫びました。
「おまえは確かに大勢の人たちを助け、癒やし、救った。だが、どうだ、今おまえは十字架に釘付けにされ、動けない、その苦しみから自分を救い出せないのか。神に頼んで助けてもらえば良いではないか。イスラエルの王だと言っているのだから、神は救ってくれるだろう」

神の律法を教えているはずの人がなんとひどいことを言うのだろうと私は思いました。
律法では、殺してはならないと教えており、神を愛し、人を愛することこそ大切だとおしえているはずなのに、この宗教指導者たちの態度と言葉はいったいどこからでてきているのだろう。まるであの方の苦しみを「楽しんでいる」ようにさえ感じる態度だし、報復をしているかのような口の利き方をしている。

これらの言葉があの方の耳に届いた時、あの方の心の痛みはどれほどだろう。

あの方は。誠実」であり「弱い人の味方」「生きることを励ます姿勢」に満ちていたのに。
そのすべてが否定されているような態度と言葉だけが十字架の周辺に渦巻いている。

あの方の十字架の両横に一緒に磔にされている強盗たちもあの方を罵(ののしって)いるようだ。

時間だけがむなしく過ぎていくように感じる重苦しい空間のなかで
突然周囲が暗くなり、その暗闇の中であの方の言葉とうめき声とが混ざり合って聞こえている。

当時の社会を構成するすべての人たちから侮られ、見捨てられ、軽蔑が向けられている十字架のうえのあのお方。

周囲の人々の怒鳴り声や軽蔑の聲ががだんだん静かになり、この処刑も終わるのかと思われた時、あの方の大きな声が響きました。どこにあんな力があるのだろうと思われるほどの大きな声でした。「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになられたのですか」という悲痛な叫び声でした。
でも、その後のあの方の表情は憑きものが落ちたかのように穏やかなものになっていました。

それは死がもたらした平安ではなく、使命を果たした後の達成感や勝利を感じさせる大満足の表情のようでした。

一体、何があったのでしょうか。

Youtube での MACF の礼拝説教は
<https://youtu.be/qxwVRc5Y4dg>

